

雨宿りの箱庭

一向精神薬で悪化した PTSD 性不登校が 14 個の箱庭で解消した男子高校生の事例—

森下 温美
(関西医療学園)

I. 問題と目的

『雨宿りの箱庭』と称する PTSD 予防と治療に関する第 12 報で、昨年に引き続き社会問題化している薬害 PTSD に対する箱庭療法の 2 例目である。

II. 事例の概要

クライアント（以下 CI と表記）は、中 2 の冬頃からいじめで不登校に陥り、進学した私立高校は退校扱い、定時制高校に入学し直しても不登校状態が続き、同級生は大学生になったが、本人は高 1 であった。私立高校退校の頃にスクールカウンセラーの勧めで心療内科に通うようになり、パキシル・マイスリー・ジェイゾフト・ストラテラ・レクサプロ・サインバルタが、調子が悪いと訴えるとさらにアレルギー薬や血圧を上げる薬、胃腸薬などを処方されていた。セラピスト（以下 Th と表記）に会う直前に、一気に断薬したうえで、母親（心療内科通院中）とともに来談、12 回の箱庭面接により（通い始めていた大学の相談室は中断）離脱症状も消失し、9 か月で完全に登校できるようになった。本人の箱庭はほとんど砂の表現であり、母親のカラフルかつトラウマティックな表現と陰陽的に相関しながら約 5 年間の問題が解決した事例である。

III. 面接経過

1 箱庭①②

母子一緒に来室。母親は気がついた時には親子で向精神薬依存症に陥ってしまっていた後悔と不安、ストレスで胸が詰まる苦しみを語り、その傍らで CI は「砂を触りながら聞いていると落ち着く」と切り出し、感情が平板化して食べられない等の苦痛を訴え、離脱症状や食事について Th に積極的に質問することで治癒の可能性を感じたのか母親とともにそれぞれ箱庭制作。「砂の感触が気に入った」「手を洗いたい」と言う。

2 箱庭③ 1 か月後

母親は頭痛がするとかで CI 独りで来室。心療内科医に対する思いを語り、睡眠時間の話や薬の話をし、真面目だから足元をすくわれたが真面目だから回復していると言って、箱庭に向かう。手を洗う動作までが

大事な儀式のように最後（# 12）まで繰り返される。

3 箱庭④⑤ 1 か月後

母親は体調不良やパニック発作の始まりの話をし、箱庭で「発散しました。」子どもはアシュトンマニュアルを熱心に読み、箱庭を置く。母親が来室間隔を詰めたかどうかと言うが、現状（月 1 回）がよいと CI。通学とバイトを検討しているらしいと聞いて Th は驚く。

4 箱庭⑥ 1 か月後

母親は体調不良で本人のみ来室。離脱症状について話すなかで、母親について減薬の態度等考えが甘いとは批判するが、帰り際には「心配です」と気遣う。添付文書など熱心に読むので、持って帰るように勧めるが落としてはいけないと思った CI は遠慮したらしい。

5 箱庭⑦ 1 週間後

母親が予約して来室。減薬のむずかしさや罪悪感それを巡って親子喧嘩になった話、実家の精神科既往歴と実家でパニックになった話、高 1 の弟のクラブ活動の世話が闘病中の身には大変であること、これまで治療や学校にたくさんのお金をかけてきたこと、食事の話をしたあと、箱庭に食べ物のミニチュアを置く。

6 箱庭⑧ 2 週間後

母親が元気を振り絞って来室。減薬のポイントやコツ、心身相関がようやく理解でき始めたらしい。CI への批判は意外であったが、心療内科医に嫌味、実母に本心が言えるようになった話が出たので、不登校になった時のことを質問すると、いじめが原因であり、自殺しようとしたこと、現在も父親が CI を邪険に扱っていることが判明。まだ終わっていないからきちんと対応しようと思いつくと速やかに理解を示し、CI や家族に適切に関わったと推測されるが、母親は体調不良に陥る。箱庭は曼荼羅調。翌週来室できずメールでパニック発作等は義父が原因の PTSD であると予告。

7 箱庭⑨ 2 週間後

CI が学校からそのまま来室。表情もよく学校でも対人関係が楽になったと話す。いつ頃からしんどくなったのか、本当はどうしたかったのか回想しつつ、勉強

に集中するために部屋の模様替えを考えている話。檻に指を押し込んでいたので、これからは誰の言うことも聞かないようにしようと提案、「薬を勝手にやめた人だから」と Th は励ます。CI は砂を触りながら、「爪かみがなくなった」「想像力が回復すれば」と話し、手を洗い眼鏡も拭いてゆったりしている。

8 箱庭⑩ 1 週間後

高校での初めての試験中、母親がすっきりした装いで来室。がん検査の話や水の話、亡くなった犬の話をして語る。周囲にあまり気をつかわなくなった CI に対し母親は不満のようで、実母擁護もまた復活するが、「Th は CI と対等ですよ」と言う目には涙。

9 箱庭⑪ 2 週間後

母親来室。パニック発作はなくなった。CI は毎日自力で起きて登校し、テストも受けられた。離脱症状も消えかかっている実感があるらしい。発達障害支援につながれた時の本心を語り、箱庭でも「埋もれる私」を表現する。父親がいつの間にか協力的になり、CI とよく話し、母親の来室の送迎をするようになっていた。

10 箱庭⑫ 1 週間後

CI が学校帰りに来室。食べる量も回復、楽しさも感じる。後遺症の話や睡眠の話、食事法を熱心に質問。

11 箱庭⑬ 1 週間後

母親来室。参観日で学校での CI を見てうれしかった話、一度寝過ごした CI に激怒された話。胸も詰まらなくなった。CI はおばあちゃんの家によく行くようになり、将来の話などしている。CI の人徳の話と、舅にいじめられた話をしていたら雷が鳴る。

12 箱庭⑭ 4 か月後

夏休みや連絡ミスで中断気味のなか、不安に苛まれる母親からメールが届いていたが、本人はけろっとして元気そう。単位等学校のシステムを説明しながら、もう問題は感じていないが、最後に一度来室しておきたかったと言う。背が高くなったように見えた。

その後

母親からの年賀状には笑顔の CI が弟と一緒に写っていて、母親は単位が取れて嬉しい、今年は自分も時期を見て断薬を頑張りたいと書いていた。

IV. 考察

1. 薬害問題の流行

CI はいじめにより自殺願望が起こるほど（PTSD 発症リスク）追い詰められ、不登校に陥ったのだが、ス

クールカウンセラーが紹介する心療内科で発達障害と診断された結果、多剤投薬治療を受け、状態はさらに悪化、本人の弁によると特にストラテラは感情の平板化が激しく、食べられなくなって辛かったらしい。精神科治療学 5 月号では、DSM 5 的にすべてを表面的に見立てて発達障害とかうつ病、依存症として扱うのではなく、原因としてのトラウマから見直すことが推奨されているが、断薬の離脱症状の程度や期間は心理的なものと深く関わってくるので、心理療法で心身霊全体の対応をすることが重要であると思う。

2. トラウマ記憶の取り扱い

トラウマ記憶は過酷なものであるから、自我で思い出させ再処理させるような方法は危険であり、記憶内容によっては麻酔なしの外科手術とも呼ばれている。CI のようないじめ問題でも、当事者はそれを回想し、Th に語ることに抵抗があったように感じられた。母親もあまりに大変な記憶であるがために、それはもう終わったこととして取り扱いたかったように見受けられた。PTSD は不安障害であり、ストレスに弱いものだから、直接聞き出すのではなく、薬や食事に対する不安や疑問など現実の話に答えながら箱庭を置いてもらったりするなかでトラウマを昇華させるのが理想的な方法であるのではないと思われる。

3. PTSD 負の連鎖を断ち切る作業

2. のような理由で家族歴の聞き取りは不全に終わっているのが全体像は不明だが、この家族には、PTSD の負の連鎖が顕著であった。しかし、母親のころの傷がある程度癒えてくると、自他の区別の蘇りとともにお互いに思いやることができるようになった。

4. 砂だけの作品と陰陽五行説的呪術

CI は砂の感触が心地よいと言い、砂に触れるのを楽しみにしていて、「爪かみをしなくなった」「自然と離れてた」と気づきや回想を語った。意識的には身体症状への苦しみが強かったが、土気を通して、地門（身近な人間関係）を調整しつつ、母親にもいろんな記憶を回想させ、山を作らせ（鬼門）、雷（木気）を呼び、涙（水気）を流させ癒しを与えることで、自らも元氣（五気の循環）を取り戻したのではないだろうか。ふと、場所的論理と宗教的世界観（西田哲学）という言葉思い出した。

V. 文献

松本俊彦ら（2014）. トラウマという視点から見た精神科臨床. 精神科治療学第 29 巻 05 号. 星和書店.

雨宿りの箱庭

森 下 温 美
(関西医療学園)

一向精神薬で悪化したPTSD 性不登校が14個の箱庭で解消した男子高校生の事例一

I. 問題と目的

『雨宿りの箱庭』と称するPTSD予防と治療に関する第12報で、昨年に引き続き社会問題化している薬害PTSDに対する箱庭療法の2例目である。

II. 事例の概要

クライエント(以下CIと表記)は、中2の冬頃からいじめで不登校に陥り、進学した私立高校は退校扱い、定時制高校に入学し直しても不登校状態が続き、同級生は大学生になったが、本人は高1であった。私立高校退校の頃にスクールカウンセラーの勧めで心療内科に通うようになり、パキシル・マイスリー・ジェイゾロフト・ストラテラ・レクサプロ・サインバルタが、調子が悪いと訴えとさらにアレルギー薬や血圧を上げる薬、胃腸薬などを処方されていた。セラピスト(以下Thと表記)に会う直前に、一気に断薬したうえで、母親(心療内科通院中)とともに来談、12回の箱庭面接により(通い始めていた大学の相談室は中断)離脱症状も消失し、9か月で完全に登校できるようになった。本人の箱庭はほとんど砂の表現であり、母親のカラフルかつトラウマティックな表現と陰陽的に相関しながら約5年間の問題が解決した事例である。

III. 面接経過

1 箱庭①②

母子一緒に来室。母親は気がついた時には親子で向精神薬依存症に陥ってしまった後悔と不安、ストレスで胸が詰まる苦しみを語り、その傍らでCIは「砂を触りながら聞いていると落ち着く」と切り出し、感情が平板化して食べられない等の苦痛を訴え、離脱症状や食事についてThに積極的に質問することで治療の可能性を感じたのか母親とともにそれぞれ箱庭制作。「砂の感触が気に入った」「手を洗いたい」と言う。

2 箱庭③ 1か月後

母親は頭痛がすとかでCI独りで来室。心療内科医に対する思いを語り、睡眠時間の話や薬の話をし、真面目だから足元をすくわれたが真面目だから回復していると言っており、箱庭に向かう。手を洗う動作までが

大事な儀式のように最後に(# 12)まで繰り返される。

3 箱庭④⑤ 1か月後

母親は体調不良やパニック発作の始まりの話をし、箱庭で「発散しました。」子どもはアシントンマニキュアルを熱心に読み、箱庭を置く。母親が来室間隔を詰めたらどうかと言うが、現状(月1回)がよいとCI。通学とバイトを検討しているらしいと聞いてThは驚く。

4 箱庭⑥ 1か月後

母親は体調不良で本人のみ来室。離脱症状について話すなかで、母親について減薬の態度等考えが甘いと感じるが、帰りに「心配です」と気遣う。添付文書など熱心に読むので、持って帰るように勧めるが落としてはいけないと思ったCIは遠慮したらしい。

5 箱庭⑦ 1週間後

母親が予約して来室。減薬のむずかしさや悪感それを巡って親子喧嘩になった話、実家の精神科既往歴と実家でパニックになった話、高1の弟のクラブ活動の世話が闘病中の身には大変であること、これまで治療や学校にたくさんのお金をかけてきたこと、食事の話をしたあと、箱庭に食べ物ミニチュアを置く。

6 箱庭⑧ 2週間後

母親が元気を振り絞って来室。減薬のポイントやコツ、心身相関がようやく理解でき始めたらしい。CIへの批判は意外であったが、心療内科医に嫌味、実母に本心が言えるようになった話が出たので、不登校になった時のことを質問すると、いじめが原因であり、自殺しようとしたこと、現在も父親がCIを邪険に扱っていることが判明。まだ終わっていないからきちんと対応しようとするかと速やかに理解を示し、CIや家族に適切に関わったと推測されるが、母親は体調不良に陥る。箱庭は曼荼羅調。翌週末まできずメールでパニック発作等は義父が原因のPTSDであると予告。

7 箱庭⑨ 2週間後

CIが学校からそのまま来室。表情もよく学校でも対人関係が楽になったと話す。いつ頃からしんどくなったのか、本当はどうしたかったのか回想しつつ、勉強

に集中するために部屋の模様替えを考えている話。指を押し込んでいたので、これからは誰の言うことも聞かないようにしようと言った。CIは砂を触りながら、「爪人だから」とThは励ます。CIは砂を触りながら、「爪かみがない」「想像力が回復すれば」と話し、手を洗い眼鏡も拭いてゆったりしている。

8 箱庭⑩ 1週間後

高校での初めての試験中、母親がすきりした装いで来室。がん検査の話や水の話、亡くなった犬の話しながら箱庭。多様な症状と気持ちの相関関係について語る。周囲にあまり気がつかなくなってきたCIに対し母親は不満のようだが、実母離脱もまた復活するが、「ThはCIと対等ですよ」と言う目には涙。

9 箱庭⑪ 2週間後

母親来室。パニック発作はなくなった。CIは毎日自力で起きて登校し、テストも受けられた。離脱症状も消えかかっている実感があるらしい。発達障害支援につなげられた時の本心を語り、箱庭でも「埋もれる私」を表現する。父親がいつの間にか協力的になり、CIとよく話し、母親の来室の送迎をするようになっていた。

10 箱庭⑫ 1週間後

CIが学校帰りに来室。食べる量も回復、楽しさも感じる。後遺症の話や睡眠の話、食事法を熱心に質問。

11 箱庭⑬ 1週間後

母親来室。参観日で学校でのCIを見てうれしかった話、一度療養ごしたCIに激怒された話。胸も詰まらなくなった。CIはおばあちゃんの家によく行くようになり、将来の話などしている。CIの人徳の話と、男にいいめられた話をしていたら雷が鳴る。

12 箱庭⑭ 4か月後

夏休みや連絡ミスで中断気味のなか、不安に苛まれる母親からメールが届いていたが、本人はけろっとしていて元気そう。単位等学校のシステムを説明しながら、もう問題は感じていないが、最後に一度来室しておきたかったと言う。背が高くなったように見えた。

その後

母親からの年賀状には笑顔のCIが弟と一緒に写っていて、母親は単位が取れて嬉しい、今年は自分も時期を見て断薬を頑張りたいと書いていた。

IV. 考察

1. 薬害問題の流行

CIはいじめにより自殺願望が起こるほど(PTSD発症リスク)追い詰められ、不登校に陥ったのだが、ス

クールカウンセラーが紹介する心療内科で発達障害と診断された結果、多剤投薬治療を受け、状態はさらに悪化、本人の弁によると特にストラテラは感情の平板化が激しく、食べられなくなったり辛かったらしい。精神科治療学5月号では、DSM 5的にすべてを表面的に見立てて発達障害とかうつ病、依存症として扱っているのではなく、原因としてのトラウマから見直すことが推奨されているが、断薬の離脱症状の程度や期間は心理的なものと深く関わっているから、心理療法で心身全体の対応をすることが重要であると思う。

2. トラウマ記憶の取り扱い

トラウマ記憶は過酷なものであるから、自我で思い出させ再処理させるような方法は危険であり、記憶内容によっては麻酔なしの外科手術とも呼ばれている。CIのようないじめ問題でも、当事者はそれを回想し、Thに語ることは抵抗があったように感じられた。母親もあまりに大変な記憶であるがために、それはもう終わったこととして取り扱ったように見受けられた。PTSDは不安障害であり、ストレスに弱いから、直接聞き出すのではなく、薬や食事に対する不安や疑問など現実の話に答えながら箱庭を置いても良かったりするなかでトラウマを昇華させるのが理想的な方法であるのではないかと思われる。

3. PTSD負の連鎖を断ち切る作業

2. のような理由で家族歴の聞き取りは不全に終わっているので全体像は不明だが、この家族には、PTSDの負の連鎖が顕著であった。しかし、母親のころの傷がある程度癒えてくると、自他の区別の蘇りとともにお互いに思いやることができるようになった。

4. 砂だけの作品と陰陽五行説的呪術

CIは砂の感触が心地よいと言い、砂に触れるのを楽しみにして、「爪かみをしなくなった」「自然と離れてた」と気づきや回想を語った。意識的には身体症状への苦しみが強かったが、土気を通して、地門(身近な人間関係)を調整しつつ、母親にもいろんな記憶を回想させ、山を作らせ(鬼門)、雷(木気)を呼び、涙(水気)を流させ癒しを与えることで、自らも元氣(五気の循環)を取り戻したのではないだろうか。ふと、場所的論理と宗教的世界観(西田哲学)という言葉を使い出した。

V. 文献

松本俊彦ら(2014). トラウマという視点から見た精神科臨床. 精神科治療学第29巻05号. 星和書店.